

〔出葉口伝抄〕 -翻刻と解題-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学古代学研究所 公開日: 2024-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石澤,一志 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000512

〔出葉口伝抄〕 — 翻刻と解題 —

石澤 一志

明治大学図書館では科学研究費補助金を得て、二〇二三年度から毛利家文庫旧蔵本の調査・整理を開始した^①。本稿はその成果の一部として、明治大学が所蔵する毛利家旧蔵本のうち「出葉口伝抄」について、解題を付し紹介するものである。

解題

本書は、毛利家旧蔵、毛利家文庫本の一。写本、卷子本・一軸。明治大学図書館蔵。請求記号、091.4/41^②。紺地紙に金銀泥で草木蝶下絵霞引、金銀小切箔を散らした装飾料紙を用いた表紙に、金箔張料紙の見返しをあしらう。表紙の大きさは、縦二三・一糎、横二二・七糎（図版1）。

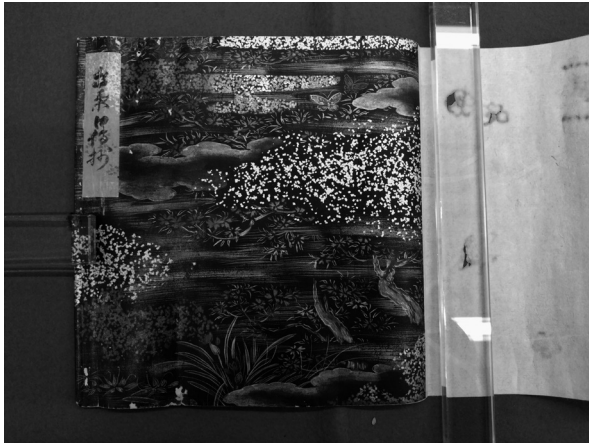
外題は、朱地金砂子撒銀泥花下絵の小短冊題簽を貼付し「出葉口伝抄」と墨書。本文料紙は、楮紙。龍文・梅花・桜花・蝶などの文様の焼絵を施す。本紙は、四紙を継いで全長二〇七・四糎。本文の字高は約二一・〇糎。本文には、「朱筆」による合点や記号（。、）が付される^③。

本文の後に、奥書「此一巻者毛利（元康）依御執心／御懇望之間口傳之已後玄仍／染筆奉送之者也／慶長四年林鐘上旬／法眼紹巴（花押）」が記される。本文と奥書の筆跡は異なり、奥書は紹巴の筆跡である（図版2）。

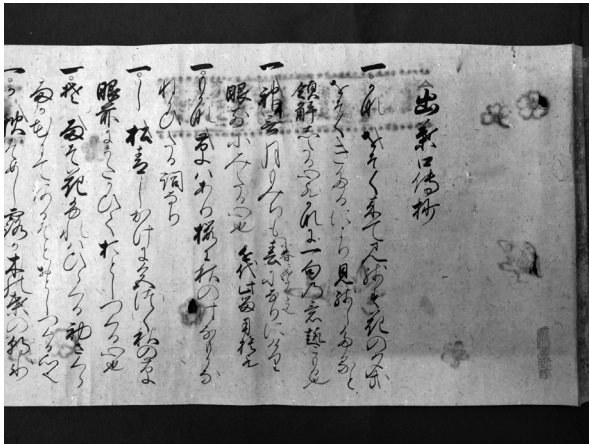
これによると、慶長四年（一五九九）陰曆六月、里村紹巴（一五二四—一六〇二）が毛利元康に口伝し、その後口伝の内容を、息男である、玄仍（一五七一？—一六〇七？）に書写させて、元康の許に送った一本であることがわかる。この奥書から、本文は玄仍の筆跡であることが知られる。

猶、本文と外題は同筆と見られる。毛利家文庫本の中に、この筆跡と同一の外題および本文は他にもいくつか知られるが、それらも玄仍の手によるものと見られる。今後の調査の進展により、その詳細と全貌は明らかになっていくであろう（図版3）。

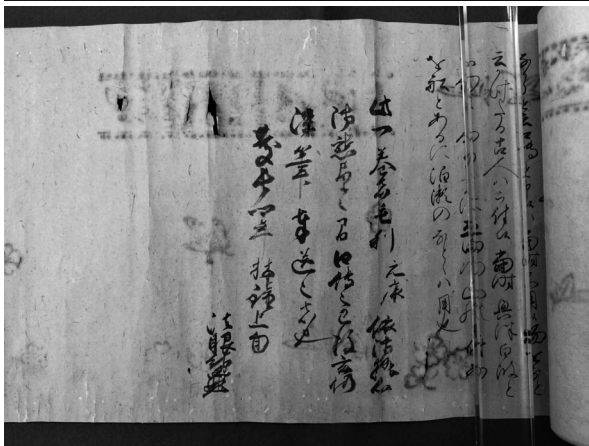
本書は「てには」の伝書のひとつであり、同名の書に『姉小路式』があるが内容は異なる。本文中に紹巴著とされる『白髮集』の名が見える。その部分を見ると「右句白髮集とて古人一冊を用捨畢」とあり、これをどう解釈するか。「右に挙げた句は『白髮集』という古人の（著した）一冊を用捨し（て記し）た」と読むならば『白髮集』は紹巴の著作ということになる。しかし「右の句は『白



図版1 表紙



図版2 卷頭・卷末部分



(出葉口伝抄)



(他本外題)



(本書外題)

『髪集』といって、古人が一冊を用捨した(ものの中にあり、それを記した)と読むならば、『白髪集』は紹巴の著作とは言えないことになるであろう。今少し考察すべきところであるが、現時点では判断を保留しておく。

内容的には前半に『白髪集』に載るところの「切字」に関する言説を記し、『宗砌田舎への状』と近似する内容を後半に示す。最後の部分は何を典拠にするか未詳であるが、総じて、紹巴の奥書によれば紹巴が「口伝」したところの内容を玄仍が記しているものなので、内容的に完全に一致する親本が存在した訳ではないのかもしれない。猶、後考を期す。

注

- (1) JPS 科研費基盤研究 (B) 「中近世毛利家における知的体系の復元的研究—明治大学図書館所蔵毛利家旧蔵書を起点に」(課題番号/領域番号 23H00605、研究代表者 牧野淳司)。
- (2) 図書館には、同一書名の「出葉口伝抄」がもう一点所蔵される(請求記号 091.4/42)。本文内容はほぼ同一で、慶長七年(一六〇二)の玄仍の奥書・印記がある。
- (3) 明治大学デジタルアーカイブ <https://m-archives.meiji.jp/> にカラー画像が公開されている。朱筆の合点や記号(。、)を全て再現、または注記することは困難で、煩雑にもなるので省略した。詳細は、上記アーカイブから当該作品の画像 <https://m-archives.meiji.jp/content/detail/L100001177> を御覧頂きたい。
- (4) 当該本を書写したのが、もう一点の「出葉口伝抄」(前出、請求記号 091.4/42 <https://m-archives.meiji.jp/content/detail/L100001178>) である可能性はある。しかし、これらの親本が存在したかどうかは、現時点では不明である。

翻刻

〔凡例〕

- 本稿は明治大学図書館蔵「出葉口伝抄」(091.4/41、毛利文庫本)の翻刻である。
- 翻刻にあたっては、字配り・改行など、できるだけ底本に忠実に翻字し、「傳(伝)」「聲(声)」「躰(体)」「嶋(島)」「瀧(滝)」「當(当)」などは、そのままとした。

△出葉口傳抄

- 一。かな ~~を~~そく来て見残す花の夕哉
をそくきたるにより見残したると
領解したる心歎かなに一句の意趣こもる也
小春に成たると成
- 一。神無月もみちも春になりけり
眼前にみたる心也 ・近代此留用捨歎
- 一。もかな ~~草~~はあり桜に秋のはなもかな
ねかひたる詞なり
- 一。し ~~松青~~しかけに色つく秋の草
眼前にうたかひておとしつくる心也
- 一。そ ~~雨~~そ花ふれはひらくる初さくら
雨か花にてあるそとおとしつくる心也
- 一。か ~~秋~~そめし露か木の葉の朝氷
ふかくうたかひたる心也 ・此一句無分別如古本
- 一。よ ~~降~~くれよあすは時雨に嶺の雪
せめたる詞歎

- 一。せ染つくせ紅葉むらこのかた時雨
をしくたしたる詞也
- 一。れ氷れたゝ流のうへも水の雪
たのめて成敗したる心也
- 一。へ雪待て花にちりそへ下紅葉
さいそくしたる心也
- 一。けふけ嵐花なき春の青木立
おとろかしたる詞歟以上五は少心かはり
たるといへとも皆下知したる詞なるへし
- 一。や露や色花のこぬれの朝ほらけ
うたかひの詞なり
- 一。つ花は見つ紅葉はをそき秋の草
花をは見をはんぬと云つめたる詞也
- 一。ぬ雪は花青葉になりぬ松の風
うたかひてさて成たるよとおとしつくる
詞也つに心かよふ歟
- 一。ず聲はおもひもあへず郭公
思ひもあへぬ程に今一聲と心こめたる詞也
- 一。じ降つがじ初雪はるゝ空の雲
ふりつかしとおもひ定たる心也
- 一。らん風よりも日数にちらん花の春
日数にちらん物をとふかき心をふくめり
- 一。いかに月いかに木の下やみの松の雨
雨中に月はいかなる事そととかめたる
詞なるへし此下に・いく・など・なぞ・いかゝ・いつ
れ・いつこ・いつら・なに・いつち 同通也
右句曲髮集とて古人一冊を用捨畢
- 一。欠方の光のとけき春の日にしつ心なく花のちるらん
なにとてしつ心なくちるらんと也
- 一。秋そゆくなへて世中しくるらん
- 一。山さむく日影そよ所にしくるらむ
皆これは惣也
- 一。山さむし日影やよそに時雨るらむ
是は道理も風躰も可然也
- 一。山里は雪や木葉に道たえて如此物
を二ならへてのやの字にてはたと留候又にとも

一 五月雨は峯の松風谷の水

一 あなたうと春の日みかく玉津嶋周阿仕候

切たると不切との事玉つ嶋は無疑候

あなたうと五もしにて切候谷の水きるゝか

と心得候事口傳候 月やあらぬ春や昔の

春ならぬ是は五もしにて切候

一 みとり子の見るめのまへに翁さひある世

にたにもかはるすかたを 定家卿御哥也

切字なく候すかたをにておとろかぬ事よと

云心を卅一字の外に持たる哥にて候又

秋とたに吹あへぬかせに色かはる生田の森

の露の下草此哥にて相傳あるへし

一 霰地のあやをりみたる冬の雲 宗砌

一 花はひも柳は髪をときつ風

花やひも柳やと候へは花の方治定して

柳の方よはく候歟此時切字相傳用ニ立候也

一 夕立に都の宿も瀧のもと是は不切候也

但不習人もしあつる事もあるへく候歟以上

宗砌田舎への状とて一冊在之

一。こそ^{・けめ}・けれ。そ^{・け}・ける。して^{・けり}。や^{・らん}・らし。は^{・けり}・らめ

一。十八切字あれは。て又。にととまりかたく候と

文字とのもしとにてをさへ候へは留候古人のしるし

たるににてのかな又うけてにはかけてにはとめ

なからと云口傳と申候は當時不用候物をなと

云かけたる古人は被付候 當時興津白波と

下句にとまりたるに立田の山のと付あま

を船とあるに泊瀬のなとゝは用也

此一巻者毛利 ^{元康} 依御執心

御懇望之間口傳之已後玄仍

染筆奉送之者也

慶長四年林鐘上旬

法眼紹巴(花押)